Study Series No. 73 *March 2017*

カール・ビュッヒャー『現在と過去の大都市』

訳　森　宜人

Karl Bücher, "Die Großstädte in Gegenwart und Vergangenheit", in: Theodor Petermann (Hg.), *Die Großstadt. Vorträge und Aufsätze zur Städteausstellung,* Jahrbuch der Gehe-Stiftung Band IX, Dresden 1903, S. 1-32.

Übersetzt von Takahito Mori

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

カール・ビュッヒャー
『現在と過去の大都市』

森　宜人　訳

Karl Bücher, “Die Großstädte in Gegenwart und Vergangenheit”, in: Theodor Petermann (Hg.), *Die Großstadt. Vorträge und Aufsätze zur Städteausstellung,* Jahrbuch der Gehe-Stiftung Band IX, Dresden 1903, S. 1–32.

Übersetzt von Takahito Mori

目　　次

カール・ビュッヒャー『現在と過去の大都市』..... 5

原註..... 21

訳者あとがき..... 23

カール・ビュッヒャー『現在と過去の大都市』

森　　宜　人 訳

来春、ドレスデン市内において〔ドイツ都市〕博覧会が開催される。この博覧会は、他の博覧会と比べると、新規性と実用性において優ることとなるであろう。それは、われわれの近代的文化発展の一領域における進歩、すなわち、われわれの大都市生活における諸施設を展示するという点において新しい。また、散発的な経験は存在するものの、その計画的利用や、堅固な目的意識にもとづく行動のための諸原則の列挙が稀にしか試みられてこなかった領域において、この博覧会によってきわめて有用な問題提起がなされることに疑問の余地がないゆえに、実用的なのである。

ゲーエ財団Gehe-Stiftungは、一連の講演を開催することによって、1903年のドイツ都市博覧会の準備をしようと望んだ。これらの講演では、同一対象を多様な視点より考察することとなろう。同財団はこれにより、博覧会を印象深いものにしたいという要求をかなえることとなる。そうした要求が存在することはここ最近、さまざまな局面で認識されており、また、都市自治体および都市自治に関心を寄せている財団の出資者の意図に沿うこととなる。都市の数の点でも、そこに集う人々の規模の点でも、過去100年間に驚異的な発展を遂げた大都市とは、文化的発展一般においていかなる存在であろうか。その本質はいずこに存するのか。あらゆる文化諸国における大都市の途方もない成長は、いかなる原因によるものなのか。大都市は、物質的に、また観念的に、国民の過去と将来にいかなる意味を有するのであろうか。大都市は、その〔直面する〕課題を適切な形で果たすためには、いかに整えられなければならないのか。ここでは、以上のような問題や、また類似の問題について、純粋な科学的考察に資するような形で聴衆諸賢に語ることとなろう。

そのようなことを検討することは、大都市在住の聴衆にとっては無用のことかもしれない。そもそも、すでに人類のなかで特別な種を形成している大都市のホモ・サピエンスは、その多忙さゆえに、自己について省察をめぐらし、また、日々の雑踏や喧騒のなかで、動じることのない大局的な視点を確保するための時間を有することは稀であり、そうしたいと願うことさえもめったにない。われわれが経験してきた大都市の発展は、想像をはるかに超える激烈さでわれわれに迫ってきたために、すでにこんにち、その本質と意義を完全に解明することは不可能である。だがその起源は、現世代の高齢者たちが生まれた頃のことである。100年前、現在のドイツ帝国の領域には人口10万人以上の都市はただ1つ（ベルリン）しか存在せず、ハンブルク〔の人口〕はわずかにこれを下回っていた。当時、ドレスデンの人口は4万人弱、ライプツィヒ3万人、ケムニッツ8,000人であった。1850年、主に国内の人口増加により、ドイツの人口10万人以上の都市の数は5つにまで増えた。同規模の都市の数は1870年に8に達すると、

その増加傾向には拍車がかけられ、1880年15、1890年26、そして1900年には33に及んだ。

人口10万人以上の都市を大都市とするならば、1850年にはドイツ人の38人に1人が大都市の住民であった。1870年には20人に1人、1880年には13人に1人が大都市の住民であり、すでに1890年には人口の8分の1が、そして1900年には6分の1が大都市住民となった。同様の発展が、ドイツより早い段階で、イギリス、フランス、イタリア、ベルギーで生じ、すべての文化諸国に及ぶとともに、植民地諸国、とりわけアメリカ合衆国においてわれわれヨーロッパ諸国よりもはるかに速いテンポで進行したことは周知の通りである。都市人口の増加が、最も卓越していたのはイギリスである。同国ではすでに1891年の時点で、人口の32%以上が人口10万人以上の都市に、21.7%が人口2～10万人の都市に住み、そして僅かに28%が農村で生活していたにすぎない。

これらすべての国において、しだいに人口がいくつかの地点に集中するようになってきていることは明白である。だが、「都市社会化Urbanisierung」、すなわち文化的人間の都市化を問題とするならば、ここで示した経過からはきわめて不正確な認識しか得られないであろう。新興国家の住民が前世紀に直面していたのは、すでに18世紀中葉から始まっていた持続的な人口増加という状況である。わがドイツでも過去数十年間に持続的な人口増加がみられ、移住による人口減少を除けば、人口増加率は毎年1%であった。近年、新しい都市が建設されることはきわめて稀であり、したがって、必然的に人口が既存の居住地において自己増殖することは自明のことである。例えば、1800年に人口4万人であったドレスデンは、出生超過による人口の自然増により1900年までに大都市となった。すなわち、人口10万人の壁を破るに至るまで成長したのである。その上、他の33大都市のなかでも同様の経過が多くみられた。たしかに、それらの大都市のなかには、ケーニヒスベルクやダンツィヒのように、18世紀末以降の人口増加が持続していれば当然達していたにちがいない水準に、実際には及ばなかった都市もいくつかある。同様のことは、プロイセン全土の人口、ないしケーニヒスベルクとダンツィヒを取り囲む州の人口にもあてはまる。ベルリンは1816年にすでに20万人弱の人口を有していたが、その当時の旧プロイセン諸州と同程度の人口増加を経験していれば、すでに19世紀末以前には50万人を超えていたであろう。

このように、われわれの大都市の存在基盤は、人口の自然増にその一端がある。このことは、1750年以降に増加した分の人口を、その当時すでに存在していた全居住地に、当時の人口比で割りふれば明らかとなろう。しかし、それは〔都市人口の増加要因の〕恐らくごく一部にすぎないであろう。というのも、同じ時期に、人口移動が生じたためである。増加した分の人口は、既存の居住地に同じ比率で割りふられたわけではない。ある場所では自然増によるよりも早く人口が増加し、またある場所ではそれよりも遅かった。人口に変化のなかった場所は少なく、それどころか減少したところさえもある。この人口変動は、都市への移動として特徴づけられる。これにそぐわない事態が見出されることも稀にあった。まさに、これまで最も人口が多く増加し、現在でも最も急速に増加している場所が村落自治体であり、そして、人口が

停滞し、それどころかむしろ減少さえした場所が都市であるということもあるのだ。

時間の経過によって生じたこのような状況は、多くの居住地の公法的立場と鋭く矛盾する。多くの自治体が歴史的正統性にもとづいて都市の名称を用い、都市法の下にあるが、人口規模にかんしては、非常に多くの村落自治体の後塵を拝しているのである。逆に、多くの村落自治体が、1万人、1万5,000人、2万人、3万人の人口を有し、4万人以上を数えるケースがあるが、それらは行政組織としては村落自治体に分類され、また、そのように扱われてきた。ザクセンで1900年に4,000人以上の人口を数えた151の自治体の内、78が都市自治体、72が村落自治体である。後者のなかのある自治体（レプタウLöbtau）の人口は3万3,000人を超える。プロイセンでは1890年に、1,263都市の内、68都市の人口が1,000人を下回り、346都市が人口2,000人以下であった。すなわち、誇り高き都市の名を冠する自治体の4分の1が、人口面では村落段階にとどまっていたのである。人口4,000人を都市と農村の境界線とするならば、全「都市」の5分の3以上（762）がこの線の下にとどまることとなる。反対に、1900年12月1日時点の人口調査において、人口1万人以上を数えた自治体318の内、73（= 22.9%）が村落自治体であった。このなかで最も人口規模の大きい2つの自治体（エッセン郡Kreis EssenのアルテンドルフAltendorfとボルベックBorbeck）の人口を合わせると、11万人を超える。これら73自治体では1895年以来、ほぼ40%の人口増加がみられ、他方、人口1万人以上の245の都市自治体の人口は20%増加したにすぎない[1]。

このような人口構成の変化によって惹起された不均衡が、ザクセンほど顕著に認められるところは他にない。ザクセンでは1834年に、人口のわずか3分の1が「都市」に居住していたにすぎず、3分の2は農村に住んでいた。また、人口2,000人を基準にした場合でも都市と農村の比率は同様であった。しかし1900年には、「都市」と農村の人口半半となった。他方、人口の約10分の7が、人口2,000人以上の自治体に住んでいた[2]。すなわち、集住人口の約5分の1が大規模な村落自治体に属していたのである。

実際、統計学者はずいぶん以前より、古い都市概念が意味を失い、こんにち、居住地は人口規模によってのみ区分され得る、ということを認識していた。それによって彼らは、われわれが目の当たりにしてきた大きな変動において、いわば2つの相異なる世界が衝突している事実を知らしめようとしている。古い「都市」は没落したのである。すなわち、それらの都市は歴史的使命を果たし終え、無力な老人となって徐々に死に至った。ドイツでは、なおこんにち歴史的正統性にもとづいて都市の名を称している自治体の半数以上が、もはやその名に値しない。というのも、それらの自治体は都市の実態をともなっておらず、公的統計において、適切にも、農村都市Landstädteと分類されているからである。それら自治体の地位には、新たな社会的産物がとって代わっている。その大部分は旧都市の立地を利用している。そして、それらのなかで、村落自治体から台頭してきたものも少なくない。国民生活における新たな都市の課題は、旧都市のそれとは異なる。そして、その驚くべき成長ぶりは、都市の文化的使命の変化と密接な関係にある。

現在の都市の人口集積が過去の都市ととりわけ顕著に異なる点は、現在の都市の有機的な成長の仕組みにある。外部権力の強制や、諸侯の命令が現在の都市成長をもたらしたのではない。都市の石造りの家々とアスファルトの道路を埋め尽くす何十万人もの人々や、彼らの先祖は自発的に都市にやってきたのであり、なかんずく経済的動機によって突き動かされてきたのである。望むならば、誰もが都市を後にすることができる。しかし、都市を囲む城壁のなかは無人になっておらず、また、家々も荒廃していない。むしろ毎年、呪術にも似た都市の引力に引き寄せられた多数の人々を収容するために、多くの新しい建物が建設されなくてはならない状況にある。そして、いまだに、この人口大移動の終焉を見通すことはできない。

たしかに、過去にも大規模な人口の集積はみられた。テーベ、メンフィス、バビロン、ニネヴェ、スーサ、エクバタナの名は、われわれをはるかな古代へと誘う[3]。旧約聖書の預言書ヨナ書（3：3）には、「大都市」ニネヴェは3日旅程の広がりを有していたと記されている。ヘロドトス（〔『歴史』〕第1巻第178章）によれば、バビロンはとてつもなく巨大な四角形を形成し、各辺は120シュタディオン、すなわち全周480シュタディオン、現在の尺度に換算すれば88 kmある。したがって、面積は484 km^2に及び、それはベルリンの8倍、ドレスデンの12倍の大きさに相当する。ある神学統計学者は、ニネヴェには「12万人以上の右も左もわきまえぬ人間〔…〕がいる」というヨナ書（4：11）の記述に依拠し、同市の人口は100万人であったと推計している[4]。それがどのような状況であれ、住民が堅固な城壁に囲まれていたことは確かであり、同時代人ばかりでなく、後世に同市の廃墟を目の当たりにした旅行者も、その規模の大きさに驚嘆した。だが、これら古代都市をわれわれの大都市と比較することはできない。そこには、相互につながった道路はなく、大小の家屋群を有する壁に囲まれた複数の地区（Territorien）が存在した。それらの間には、耕地、庭園、牧場、果樹園が広がり、戦時にはその周囲の全住民および家畜に対して〔難を逃れるための〕空間を提供した。その巨大さのために、外敵はこれを包囲することができなかった。したがって、バビロンが陥落してから3日経った後にも依然として、「市」の一部ではその事実がまったく知られていなかった、というアリストテレスの言葉は信ずるに値しよう[5]。

だが、これらの都市建設は、軍人出身の個々の強力な支配者による大帝国の興国と密接な関係があったと考えられる。したがって、これらの大都市は同時に宮殿でもあった。都市の中央には王城がそびえたち、王城そのものにも同じく防衛のための巨大な石像と環状城壁が築かれていた。王城の中には支配者が、財宝、その婦人と衛兵、無数の奴隷を従えて居を構えている。王城の近くには、国の神々の神殿がある。その周囲には、戦時の際に直ちに動員できるよう、部族の自由民が住んでいる。他方、遠征の際、婦人と子どもについては、略奪行為をはたらく遊牧民の襲撃から保護するために、後に残される。これらの部族が代わる代わる、小アジアを支配したのであった。すなわち、アッシリアによってカルデアが、バビロニアとメディアによってアッシリアが、ペルシャによってメディアが〔それぞれその地位を奪われたのである〕。しかし、その際、大都市の中で唯一、完全に破壊されたのはニネヴェだけである。ペル

シャの王たちは、3つの王都に代わる代わる居を構えた。すなわち、冬はバビロンに、春はエラムのスーサに、そして夏はメディナのエクバタナに。それは、国の支配を継承した者としての自身の存在を、全国に周知徹底せしむるためであった[6]。

だが、古代エジプトの多くの都市においては、状況はまったく異なる[7]。体面を重んじるすべてのファラオは、即位の際に、自らの名を冠した「自分の都市の建設」に着手した。このことは、中王国および新王国（紀元前2130～1050年）のファラオにかんしてはほぼ確実であり、古王国（紀元前2800～2130年）のファラオについても恐らくそうであったろうと推測される。これら諸都市は、テーベの図面にならって建設された。テーベは、大神殿の存在のために、宗教的中心地としてあり続け、そこには、王宮、穀倉、倉庫、庭園、池が存在した。その壮麗さを、宮殿の詩人は次のように詠っている。

わが大君の建てませる城
その名もゆかし「大捷」とよぶ
ところはパレスティナとエジプトのあいだ
糧食ゆたかに満ちあふれたり
その美観、南なるヘリオポリスのそれとまがい
メンフィスの都のごとく永遠に栄えん
太陽はその地平より出でて
その中ほどにして没す[8]
四方の民草、住む町を捨てて
西の国へと移り住まましし
アモンの神は都の南、ズテッヒの殿堂に在まし
アスタルテの女神は東の方に鎮座ます
ウドイトの神の鎮むるは北の方ぞ[9]
そのなかに聳ゆる牙城の大いさ
まさに地平線にたぐへつべく
此処を守る神はアモンの神の愛人、ラムセスなり…

これらの宮殿都市のなかで唯一、メンフィスだけが長期にわたって保持された。その他の都市は、その創建者の死去とともに打ち捨てられたのである。氾濫したナイル川の水が、家々の粘土壁を土に変えた。強制的に定住させられた住民は再び四散し、支配者たちがこぞって建設したピラミッドだけが、かれらのうたかたの如き存在の痕跡となる。

このように奇怪な現象はこんにちにいたるまで、アフリカにおいて、主にサハラ砂漠南縁から赤道にかけての広大な地域に見出される。そこでは、大都市の最古の類型に触れることができるので、今しばらくこの点にとどまるのが良かろう。そもそもこの地では、巨大な帝国が創

建されるところではどこでも、軍人出身の卓越した支配者によって最初のきっかけが与えられる。彼らは近隣諸部族を征服し、次いで配下の戦士とともに堅固な都市を建設し、それによって臣民に畏怖の念を抱かしめたのである[10]。このような王が亡くなると、その後継者は別の地に新たな宮殿を建設する。そして、古い都市はすぐに打ち捨てられ、没落するがままにまかされるか、もしくは、そのごく一部においてのみ人が住み続けたのである[11]。同様の事態は、帝国が外部の侵略者に屈服した場合にも起こる。例外は、征服された宮殿がしばしば、代官の居住地としてひそやかに存続することとなる場合のみである。

スーダン、とりわけフルベ州では、このような都市の屍骸が他のどこよりもよくみられる。そこでは、都市の屍骸がイスラーム侵入のしるしとなっている。旅行記によって、ソコト、カノ、ガンド〔族の住んでいた地域〕、クサ、カトセナ、マゼナなどの大都市の広がりについて読むと、古バビロンに関するヘロドトスの記述が鮮明によみがえる。過酷な賦役によって建設・維持されていたとほうもなく巨大な城壁が、広大な土地を囲んでいた。そこでは、家屋が建っているところは少なく、大部分の土地は、耕地、牧場、ナツメヤシの林となっている。唯一の立派な建物は支配者の宮殿であり、その近くでは毎日、活気に満ちた市場が開かれている。生命と財産の保障は、城壁のなかにおいてのみ存在する。城壁の外には、その間近にまで砂漠の部族が跋扈しており、武装せずに都市を離れる者には災いが訪れる！ バルトやナハティガルの著作を読むと、これらの大都市は遠方から見れば非常に堂々としているが、城壁のなかは荒れ果てていることが珍しくない、という印象を何度うけたことか[12]。有名なトンブクトゥでさえ、1894 年にフランス軍が無血入城した際、瓦礫の山にすぎなかった。トゥアレグ族の鉄の一撃により、すでに死の都市となっていたのである。

われわれは、このような都市類型を原始的専制君主大都市とよぶことができよう。鉄のような強制力がこの都市を建設し、住民をこの地に駆り立て、集住させたのである。被征服民の貢租が圧制者の貯蔵庫を満たし、数千人の廷臣と無数の下層民を十分に養った。さらに、外征が次から次へと「はかり知れないほどの略奪品」をもたらした。わずかばかりの奢侈品工業と、多少の対外交易が城壁の外で営まれていたであろう。しかし、全般的にみると、これらの都市は単に防衛機関と支配手段であるにすぎず、経済的には純粋に消費体である。その住民は庭園、耕地、果樹園から収穫を得ていたものの、それ以上に、これらの都市が国民の財生産に寄与することはなかった。

ではここで、古代の古典民族であるギリシャ人とローマ人に目を転じてみよう。彼らの歴史全体は都市史そのものであり、国家は都市国家である。そして、彼らの国家制度は都市制度であり、文化は都市文化である。とはいうものの、彼らは純粋な農耕民族として歴史に登場したのであり、開かれた村落（χώμαι, vici）に散居し、土地の収穫物によって生計を立てていた。そして、風土に応じて部族単位で緩やかに集まり住んでいたのである。しかし、彼らの間では、こうした状況は、オリエント世界のように、1 人の部族長が多くの部族ないし全部族の支配者となって、専制的権力によって彼らに隷属的服従を強いるという事態によってではなく、

諸部族が集まって都市を形成するということによって終止符が打たれたのである。彼らは農村的居住様式を捨て、防衛に適した地において、城壁のなかに自由な共同体を形成した。その共同体は彼らに、外敵からの保護と、城壁内における活発な共同生活を保障したのである。これは、ギリシャとイタリアだけでなく、小アジアからイスパニアおよびガリアにいたる全地中海民族の間でみられた発展過程である。各地で、小部族が都市に集まった。一部は自発的に、また一部は影響力の大きい権力者の命令によって。ローマの帝政期には、この制度は蛮族諸地域にまで拡張されたのである。ガリア系のアロブローガー族Stamm der Allobrogerはローマの植民都市ヴィエンヌに、また、ゲルマン系フェルカーシャフトであるウビイー Völkerschaft der Ubierはコロニア・アグリッピネンシスColonia Agrippinensis、すなわち現在のケルンにおいてそれぞれ生まれたのである。

このように顕著な都市化Verstädterungのプロセスが最も早く進行したのは、ギリシャ人の間であった。彼らはこれを指して、シノイキスモス、すなわち集住という独自の言葉を用いた。ギリシャ精神が創造した最も偉大なものは、ポリス、すなわち都市国家の法と秩序に宿っている、といっても過言ではない[13]。このことはギリシャ人もよく自覚していた。このため、エトレール、アカルナン、ロクリスなどの都市化の発展を成し遂げていなかった山岳諸民族は、ギリシャ人によって半蛮族とみなされていた。歴史上の重要なギリシャ民族のなかでは、スパルタだけが例外的であり、支配層である騎士身分が5つの無防備な村落に居住していた。だが、その他の地域においてはシノイキスモスが完全に遂行され、その結果、例えば —— テセウスTheseusの言によれば —— アッティカにおけるように全住民が1つの都市に集住し、あるいは、ボイオーティアBoiotienにおけるように、多数の中心都市が形成されることとなった。

ギリシャ人のシノイキスモスは、分散居住は戦時の際の相互援助に不向きであり、また、各地域が独自の目的を追求した場合、政治的協同が危機に瀕する、という事実によるものであった。したがって、シノイキスモスは防衛力と市民の団結力を高めるために行われたのである。実際のところ、その都市共同体が、軍事的ならびに政治的実行力、公共心、そして公的建築にみられる芸術活動に果たした貢献は、歴史上、類のないものである。トゥキディデスによれば(〔『歴史』〕第1巻第10章)、ラケダイモン〔スパルタの別名〕とアテネは、その神殿と城壁の基礎にいたるまで破壊された。後世の人々がスパルタの栄光についての話を聞かされたとしてもまったく信じないであろうが、アテネの力については、その実情の2倍に評価することもあり得るであろう。

市場で開催される全住民参加の集会において演説者の声がくまなくいきわたることができ、市民がみな相互に個人的知己であるような小都市国家をギリシャ人は政治的精神の最高の発現とみなしていた。そして、プラトンとアリストテレスがわれわれに伝えている国家の理想像は、その本質からいえば、この実態によって形成されたものである。ギリシャ人にとって、人間とは市民のなかにおいて、また市民は国家のなかにおいて理解されえるものであった。その

ため、都市の外には、真に生きるに値する生活は存在しなかった。

厳格に実施されたならば、シノイキスモスとは、独自の特性を有する地域全体のあらゆる住居が1つの都市に集まることを意味していた。だが、この目的が完全に成し遂げられたのは、プラタイアやテスピアイなどの小規模共同体に限られていた。アッティカのような規模の大きい地域においては、多くの集落が農村部に維持されていた。もっとも、すべての行政施設は都市のなかに存在し、例えばごく一部の小農は、耕作のために、富裕な土地所有者の小作人や奴隷たちとともに都市外に定住していたが、外敵が襲来した際には、直ちに家畜と財貨を持って城壁内に避難した。富裕な市民もまた、都市内の住居の他に、農村部にも住居を有していた。ここで、1年の一部の期間、静穏な生活を営んだのである。しかし、いかなる場合においても、理想的な都市国家市民は土地所有者であると同時に農業経営者であり、理想の国家とは、その領内において市民の食料を生産するものであった。したがって、理想的な国家においては、都市と農村の対立は存在しなかった。手工業は、外国人（メトイコイ）および奴隷に委ねられた。海港を有する都市においては、その海港はしばしば「長い城壁」によって都市の防衛施設に組み入れられていた。このような都市においてのみ、住民に対する貨財供給に商業が重要な役割を果たしていた。

自然条件によって多様に区分され、自律的な都市共同体が高次の政治単位を形成していた地において、活発な国民意識の存在にもかかわらず、ただの一度も国民的統一国家が登場しなかったことは、容易に理解できるであろう。たしかに、諸都市は相互にいわゆる攻守同盟を結び、また、デロス海上同盟におけるアテネのように、同盟のなかでヘゲモニーを求めた例もいくつか存在した。あるいは、強力な共同体が他を屈服させてその領土を併呑し、また、籤によってその地の市民に配分した例もあった。だが通例、大半の都市国家が有していた強力な膨張力は、植民都市の建設によって顕現した。それら植民都市は、遠隔地において母都市をそのまま再現していた。このため、地中海のすべての沿岸および島々には、ギリシャの植民都市が次第に広がっていったのである。そして、植民都市を起点として、ギリシャ的な都市が蛮族諸国家の内部にまで浸透していった。現在のロシアの奥地にあるブディノイには（ヘロドトス〔『歴史』〕第4巻、108-109頁）、亡命ギリシャ人の建てた都市ゲロノスが存在した。30シュタディオンに及ぶその城壁は木で造られており、家々も木造、そして神殿もまた木造であった。蛮族たちは遊牧民であったが、その一方で、「ゲロノスの住民は耕地を耕し、パンを食し、庭園を有していたのである」。かれらの聖域はギリシャ風に神々の像によって飾られ、「3年ごとにディオニソスの祭礼を営み、バッカス風の饗宴を行った」。つねにただ1つの政治的組織形態のみを各地に普及させたのは、ギリシャの都市的様式の文化的波及力であった。そして、アレクサンダー大王とその後継者たちの帝国においてマケドニアの行動力と結びつくと、それは大規模な領域国家の酵母となったのである。この時代、すなわちヘレニズム時代にいたって初めて、アレクサンドリアやセレウキア、そしてアンティオキアのような真の大都市の誕生が可能となったのである。しかし、東洋的要素との濃密な混交なくして、それが成功したかどうかは大い

に疑問である。

本国ギリシャ人は大都市を建設しなかった。しかしながら、多くの人々は、最盛期のアテネを大都市とみなすであろう。たしかに、アテネの総人口に関する正確な数字は残されていない。だが、住民の幾つかの階級に関する古い情報に基づく最近の試算によれば、アッティカ全土の総人口は、25～64万人の間で推移していた。なお、その数字には、市民、メトイコイ、奴隷がすべて含まれている[14]。アテネの人口に、その海港都市ピレエウスの人口を加えたとしても、恒常的に15万人を超えることはなかった。古代より伝わる情報のなかで、最も多いのは市民の数に関するものである。それによれば市民の数は2～3万人であり、それはほぼ実情に即したものであろう。その際、看過してはならないのは、大部分が山岳地帯であるこの国には独自の資源が少なく、また、ピレエウスを積み替え地点としていた活発な中継貿易の大部分がメトオイコイの手中にあったという事実である。これほどの大規模な人口が都市内で生計を立てることを可能ならしめたのは、アテネが、デロス海上同盟において、調貢義務を有する数百の都市および島々に対して有していた支配権を変じて形成した支配関係であった。このようにして、アテネの市民は大帝国の支配者となったのであり、アリストテレス[15]の試算によれば、常に2万人以上の人々がそれにより生計を立てていたのである。

次に、われわれの主題にとって特に重要なローマに目を転じたい。というのも、その最盛期に、ローマは世界の半分に支配を及ぼし、また、その統治体系は、広大な領域に諸都市を建設させることとなったからである。これはまさに、ローマの勢力範囲に屈服した諸地域全体の都市化であった[16]。〔ローマ〕市民植民市とラテン植民市はイタリアにおけるローマ帝国拡張の都市的拠点であり、前者は沿岸地域に、後者は内陸にあった。時代が下ると、農耕植民地と軍事植民地がこれに続いた。前者は社会政策上の理由より最下層階級の定住地のために、後者は恩賞として老兵に土地を給付するために生じたものである。アウグストゥスの時代には、「ポー川にいたるまで、イタリア全土がローマの都市領から構成されるにいたった」。われわれが「ラントLand」と称するものはもはや、存在しなかったのである。こんにちにいたるまでイタリアの大部分に残っている慣行、すなわち、土地所有者が都市に住むという慣行は、この時代に起源を有するのである。こうした仕組みは、イタリア本土からさらに属州に波及したのであるが、一部はギリシャ風のシノイキスモス、または、こんにちみうけられる大都市への郊外地の合併に似た処置によるもの（これをローマ人は割りあてdas attribuereと名づけた）、また一部は、皇帝やローマ人実業家による都市建設によるもの、もしくは、いわゆる軍団駐屯都市Lagerstadtへの都市権付与によるものであった。ここではまた、村落共同体が姿を消した。公法的地位は都市のみが有し、農村はその領域となったのである。ローマ人は、蛮族地域の奥深くにまで自己の文化と言語を普及させることに成功したのであるが、その要因は、こうした都市化の仕組みと、被征服民にまで市民権を付与した度量の大きさのおかげというべきであろう[17]。

ローマ自体が、10万平方マイル以上におよぶ地球上で最も豊穣な帝国の中心として、必然

的に真の大都市へと成長したことは、なんら驚くにあたらない。いうまでもなく、その人口については、これまで一致した見解がみられない。最近の試算では、70 ～ 200 万人の間で揺れ動いている。ティベル川を経由して、属州から租税として徴収された穀物をローマへともたらす海上交通が存在しなかったならば、これほど多数の人口に食料を供給することは、古代の交通手段をもってしては不可能であった。ローマの住民には、自己の生活資源が欠けていた。すなわち、輸出産業が存在せず、また、支配的であった奴隷経済制のために、多数の住民が小売業や個人的なサービス業によって生計を立てる可能性を制約していた。アテネの住民と同様に、ローマの住民は支配者としての地位によって生計を立てていたのである。富者は、その官職から直接その財産を獲得し、また、貧者は、国家の経費によって、「パンとサーカス」を供給されていた。自身を世界の共同統治者と考えていた首都の住民の 3 分の 2 以上は、公的穀物醵出によって生活を支えてもらわざるをえなかった。このような穀物の施しを受けていた住民の数は、すでにカエサルの時代以前に、男性 32 万人に及んでいた。これに女性と子どもを加えると、最下層民の数は最低 60 万人にのぼる。のちにコンスタンティノープルに行政府が移ってからも、同様の状況が同地でみられた[18]。

イタリアおよび属州の都市の住民については、ほとんど何も知られていない[19]。おそらく、ローマ皇帝によって保障された平和のなかで、ディアドコイたちの首都がかつての人口を保つか、もしくは、その数を増加させた場合もあったであろう。また、帝国のその他の地域から、各都市が相当な数の人口を引き寄せたこともあっただろう。だが、これらの属州都市に関しては、かつてトゥキディデスがアテネについて述べたことがそのまま妥当した。このような都市の建造物の遺跡を目の当たりにすると、必然的に人口を過大評価することとなろう。この当時、それらの都市のいたるところで、文字通り、建築熱が充満していた。生まれ育った都市に対する愛着は、小規模な自治都市をも、神殿や柱堂、水道橋の壮麗さをめぐって、ローマとの競争に駆り立てた。また、莫大な財産を有する個人が、そのような壮麗な建築物を公共の用に供したことも、決して珍しくない（この事実を知ると、われわれの社会の富裕層たちは恥じ入ることとなろう）。ローマ時代の石造建築の堅牢さのために、このような贅を尽くした建造物の堂々たる遺跡はローマ帝国の各地に残されている。各都市の城壁の長さについては、昔からさまざまな数字が伝えられているが、それは人口を計る尺度とはならない。というのも、その城壁に囲まれた土地に、どれだけの家々が建てられていたかわからないからである。

そろそろ中世に目を転じる時がきたようだ。この時代を都市の最盛期と考える人は多い。そして実際、ドイツの精巧な専門地図を手に取り、中世に都市法を有していたすべての地名に下線を引くと、全土において「諸都市」が比較的近い距離を隔てて点在していたことがわかる。都市の総数はおよそ 2,300 に及ぶ。国土の全面積を都市数によって除すると、そこにはもちろん湖や、山、そして沼地も含まれるのだが、ドイツ全体で平均して、4.3 平方マイルに 1 つの都市がある。とはいうものの、ラントごとに相違がある。ザクセンではわずか 2 平方マイルに 1 都市があり、バーデンでは 2.5 平方マイルに、プロイセンでは 5 平方マイルに 1 都市があっ

た。再び地図に視線を落とすと、都市名と都市名の間に、都市以外の町、村、小集落などの多数の名前が目に入る。もし同様に、それらを各都市に均一に割りふると、平均して 30 ～ 40 の町村および小集落が 1 つの都市の取り分となる[20]。

このような居住地の構成は、都市の役割が古代とはまったく異なる社会秩序を示している。中世においても都市は第一に防衛のための手段であり、すなわち城塞だったのである。ゆえに、すべての都市は強固な市壁をめぐらしていた。戦時には、村落住民もその庇護を受ける権利を有していた。しかし、ここでいう村落住民は、古代ローマ帝国のように都市に吸収されたわけではなく、彼らは固有の社会秩序と政治的地位を有していた。彼らは、村長や、参審人、ハイムビュルゲHeimbürge、捕吏といった役職を備えたゲマインデを形成していた。村落住民は、貴族、諸侯、教会組織のグルントヘルシャフトの支配下にあった。都市が独自の都市法と都市裁判所を有していたのに対して、村落住民は村の法と裁判所の支配に服していた。都市住民は市民Bürgerとなり、村落住民は農民Bauerとなった。すなわち双方とも、互いに峻別される身分を形成したのである。古代には、都市は農村を併呑したが[21]、他方、中世において、両者は自立的、かつ同等の権利を有しつつ併存していた。

すなわち、これはギリシャ・ローマとはまったく異なる世界である。この世界は、古代と中世の経済上の差異に着目して、初めて理解できるものである。奴隷や小作人の使役を通じて耕作することもあったとはいえ、ギリシャ・ローマの都市住民は農村の土地保有者であり、農民であった。クセノフォンとカトー曰く、良き都市民は良き農民でもあるのだ。これは、われらが中世都市の市民とは異なっていた。菜園や若干の耕地で農作業に従事していたとしても、第一義的に中世の市民は〔農林漁業・鉱業以外の〕生業にたずさわる者であり、手工業者であった。都市と農村は、異なる経済的機能を有していた。農村は原材料や食料を生産し、都市は原材料を加工するとともに、その都市では生産できないものを商取引によって遠隔地から獲得していた。そして都市民と農民は、互いの生産物を交換するために都市の市場に赴き、そこで出会うこととなった。大規模な遠距離輸送が不可能な当時の交通事情において、これは必然的に強いられたことであった。都市と周辺農村は、分業による自給自足的な閉鎖的経済圏を形成する。諸都市は独占権と互市強制権を通じて元来、自身にとって有利な関係を強固なものにしようとする傾向がある。そして都市は、手工業者は農村に居住してはならない（都市強制Städtezwang、禁制圏法Meilenrecht）という原則を打ち立て、とくにその原則を実行にも移した。

すなわち中世の都市は、独自の「生産階級」を有していたのである。中世都市は、ギリシャやローマの諸都市のように、単なる消費の中心地というだけでなく、高尚な意味における生産的生業の中核であった。「労働こそは市民の誇り」〔シラー「鐘によせる歌」の一節〕。都市民の生活基盤は、アッティカやローマの都市民の如く、降伏の賠償、あるいは奴隷や小作人からの労働収益によるものではなかったにもかかわらず、安定したものであった。というのも、中世都市は手工業ツンフトにのみ都市の市場を委ね、市域外の競合者には例外的にしか〔参入を〕認めていなかったからである。都市は、1 人の市民が他の市民と同程度の生計を立てられ

るよう、配慮するのである。

その起源においても、中世都市の大半は古代都市と異なる。周知のように、通例、古代都市は公権力による指令の帰結として誕生した。たしかに中世においても同様のことは見出されるが（私が想起するのはハインリヒ１世、ヴェルフェン家、ツェーリンゲン家の都市建設である）、ほとんどのドイツ都市は村落共同体から次第に成長したものである。しかし、都市法はつねに諸侯からの付与に委ねられていた。

中世後期の都市がいかに高度な政治的自律性を有していたことか、また、都市がいかにして、農村部の支配的権力すなわち貴族と戦闘状態に入ったのか、そして最終的には、程度の差はあったものの、独立を確保することとなったのか、ということは広く知られている。

中世都市の経済状況は、１ヶ所に多数の人口が集中することを不可能にした。すなわち、この時代には大都市を見出しえないのである。何も、ケルン、フランクフルト、シュトラースブルク、アウクスブルク、レーゲンスブルクといった古い都市の輝かしい栄光に傷をつけようというのではない。しかし、これら諸都市の中世の人口はかつて、６万人、８万人、いや、あるいは12万人と記述されていたが、そうした推定はとうの昔に否定されている。最近の研究では、２万5,000人以上の住民を有する中世ドイツ都市は１つも存在しなかったということが明らかにされている。15世紀には、例えば、シュトラースブルクとニュルンベルクの人口はわずか２万人、アウクスブルクは１万8,000人、フランクフルト・アム・マインは9,000人から１万人、ライプツィヒは4,000人、ドレスデンは3,000人から5,000人程度であった。農村部の領域権力に対する都市の明白な優越的地位の基盤は、自由な法生活と、ある意味では完結した社会経済体制にあった。さらに、中央権力の脆弱さにも負うところが大きかった。それは、固定された帝国の首都のみならず、多くの都市のなかからいくつかの都市を大小の地域行政官庁の所在地として際立たせることを可能とする徹底した行政機構とも無縁の存在であった。

こうした状況は中央集権国家の形成とともに変化したので、われわれも視点を近代都市の営みに戻そう。近代の国家は、自律的な特殊権力の存在を一切認めない。このため、中世都市の自治に対して、聖俗のグルントヘルシャフトに対するのと同様の判決が言い渡されることとなった。われわれの国家は、直属する国民を知るのみである。国家はもはや、都市と土地領主に徴税と軍役の請負を課すことはなく、個々のあらゆる国民に納税と兵役を義務づけるのだ。それにともない、多層的な職業官吏制度によって担われる国家の行政機構が効果を発揮できるようになり、社会は必然的に再びその自然的要素に解体された上で、再編されることとなる。都市および町村は、国家にとって、その課題を実践に移すための局地的に区切られた団体の諸連合としての意義しかもたなくなる。都市および町村は、行政機構の末端に位置づけられた。州行政および県行政の階層的構造にもとづくその行政機構は、中央集権体制の頂点に立つものである。いずれの定住地共同体も、その特殊な諸力に応じて、全体の福利に貢献することが求められる。

しかし、この課題を効果的かつ最も経済的な方法で遂行しようとするならば、必然的に個々

の都市および町村は分化せざるをえない。いかなるゲマインデも、全体のために、あらゆることを同等に成しとげることはできない。それらは、全体に奉仕するための、1つの構成要素なのである。市壁のほとんどは、国内の安全保障のためには不要である。中世にはいずれの都市も防備を固めていたが、こんにち、国土全体の防衛のためには、若干の国境守備のための施設があればそれで事足りる。かつてはいずれの都市も傭兵をかかえていたが、こんにち、強力な軍団を収容するためには、若干数の要塞都市があればそれで十分である。ある都市は諸侯の恒久的な宮廷となり、ある都市は、州庁や、県庁、あるいは地方裁判所や地区裁判所の所在地となり、またある都市は大学や、工業専門学校、芸術アカデミーを有するようになり、さらに別の都市は、鉄道網の結節点や、見本市の開催地、湯治地などとなった。しかし、こうした分化プロセスが最も顕著であったのは、工業生産の領域である。中世においては、どの都市もあらゆる手工業部門をみずからの内に集めようとし、総じて、その試みは成功した。工業の大規模経営の利点が知られるようになると、いずれの都市や町村も、地域の諸条件が最も有利にはたらく工業の育成を試みるようになった。そしてその結果、もはや営業が都市に限定されなくなったので、その全体が農村部に立地する工業が誕生した。例えば、玩具製造や、刺繍、レース編み、南京錠製造などである。同時に、都市では工業の専門特化が進んだ。局地的な需要を充たすための品の他に、一国全体、ないしはしばしば世界市場に向けて供給される何らかの製品が大規模に生産されることとなったのである。ここで、ベルリンの婦人用コート、クレーフェルトの絹製品、ケムニッツの長靴下、ライプツィヒの製本機、そしてドレスデンの煙草に思いいたらない者がいるであろうか。必ずしもすべての都市ないし地域に、この大規模な分業プロセスにおける国内の仕事の一部が割りあてられるわけではないので、こんにち、多くの古い都市が縮小してしまった一方で、同時に、人口豊富な都市へと成長した農村もみられる。

無論、このような国内分業の完全なる変容は、人びとが一斉に移住することなしには成しとげられない。地方都市と農村が、持続的な人口増加に対して、いかなる対処をなすべきであったというのであろうか。そして、既存の営業機会に応じて、人口を一国全体にわたって再分配し得るためには、旧来の営業制限ならびに定住制限を撤廃する必要があった。営業の自由と、移動の自由の導入が必要となったのである。

これによって、この講演の冒頭で、現在の大規模な人口移動においては新旧の世界が互いに衝突することになった、と述べたことが理解されよう。この新たな世界にはもはや諸都市の特権が存在しない上に、土地緊縛も存在しない。都市と農村の差異はますます薄れていくこととなる。われわれは、もはや定住地の規模の差を知るのみである。中世にも都市への移動は存在し、都市で1年と1日を過ごした農奴は自由となった。しかし、ある都市ですべての手工業が定員に達すると、新たな移住者はもはや職を見つけることができず、都市当局は移住の制限と、ツンフトの〔対外的〕閉鎖に乗り出した。こんにち、少なくとも大工業においては、なお将来の永きにわたり、就業機会の限界を見出すことができないであろう。また、われわれの大都市の持続的成長がいつその限界を迎えるのかについても断言することができない。

しかし、1つ心にとめておかねばならないことがある。近代の大都市が擁しているような膨大な人口を養い得る可能性は、近代の交通技術と産業組織によって規定されているということである。ドイツ帝国の33大都市の人口の内、平均して、50.9％が工業に、26.1％が商業および交通に、9.4％が公務および自由職業にそれぞれ従事し、8.5％が無職（〔全体の〕6.1％を占める資産生活者ならびに年金生活者が含まれる）、そして5.1％がその他の雑業層に分類される。なお、商業および交通部門従事者の少なくとも3分の2が工業経営者によって養われており、その他の部門の人びとも収入の一部を工業経営者から得ていることを考えれば、大都市人口の4分の3が直接的ないし間接的に工業によって生計を立てているといえる。したがって、最も早期に大都市の基準を満たすことができた都市が、首都、あるいは宮廷都市、要塞、悦楽愉悦の地であったという境遇のゆえに大都市になり得たとはいえ、社会構成上、われわれの大都市が経済的には受動的であり、また本質的に消費的な要素である、という近年の主張はあきらかに誤りである。

労働の場として、すなわち最も集約的な国民生産の場として近代都市に比肩し得るのは ― 近代都市がその名に値するならばだが ― 中世都市だけである。だが、両者の間にも留意すべき相違がある。中世都市は、その生業のあり方の基盤を、調和的に発展した小営業に置いていた。その販路は、都市市場の直接的取引が農村住民を引き寄せる範囲にのみ限定されていた。これに対して近代都市は、一方的に発展した大工業によって、国内市場全体に向けて、それどころかしばしば国際市場に向けて生産を行う。その収益の余地には、いまのところ限界が存在しない。それゆえ、中世都市はその本質からして小都市であり、近代都市はその特質より大都市へと発展する傾向を有する。しかし、両都市はおおむね生産共同体であるのに対して、それ以前のあらゆる都市形態は経済的には消費共同体として特徴づけられる。原始専制君主の大都市は、戦利品と貢物の集積地であり、獲物を引きずり込む肉食獣の洞穴となんらかわりない。そうした大都市が中核をなす帝国の版図が拡大すればするほど、その都市の規模も拡張し得る。古代の両古典民族の都市は、土地所有者の防備を施した居住地であった。その都市の規模は一般に、土地所有者が開発した市域の範囲に左右された。しかし通例、その成長は、交通技術に微々たる発達しかみられなかったために、すぐに限界に達した。その例外は海港都市と、とりわけ帝国の首都だけであったが、後者は依然として原始専制君主都市の特質を多く備えていた。

より明瞭に際立つのは、政治的差異である。専制君主都市はその内部に支配者側の部族を収容し、その外部にいたのは被征服民のみであった。ギリシャのポリスは自由な公共団体であり、都市が同時に国家であった。国家統治と都市行政は一体化しており、都市と都市の関係はまさに国際法上のそれであった。古代イタリアにおいても、類似した状況の萌芽を認めることができる。ローマの強大化にともない、長きにわたり、あたかも弱小諸都市を首都の市民層に統合することを通じて、その支配の拡大を具現化しようとするかのような様相が呈せられた。結局、当然のことながら、このことは実行不能に陥った。しかし、徹底した領域的な行政機構

が登場することはついになかった。自己の領域を有する独立した自治都市が並存し、その内的秩序は、かつてのローマの体制と類似していた。中世都市もまた政治的自主性に向かう強力な趨勢を示したが、経済的に都市に依存していた村落自治体にまで支配を及ぼし得た都市は非常に限られていた。いずれにせよ中世都市もまた、その政治的位相において、近代都市とはまったく異なる。中世都市が国家のなかの国家であったのに対して、現在の都市は、人口が数十万人に達することがあるとはいえ、政治的には国家有機体総体のなかの非独立的な要素にすぎない。自治体行政は都市の内部において、国家当局の監視と指導の下、国家の目的を果たすのである。その自律的な裁量範囲は、「委譲された国家的課題」の域を出るものではない。

したがって、われわれの近代都市は発展段階全般において新たな類型を示しているのであり、われわれの文化圏にかつて存在したいかなる都市形態もこれに比肩し得ない。近代都市を創りあげたのは、専制君主の命令ではなく、民族共同体によって決定されたシノイキスモスでもなく、また政治軍事的植民でもなく、はたまた中世都市の都市法付与のような公法的手続きでもない。近代都市は、真に社会的な発展の内奥に端を発し、国民の自由を基盤に発展したのであり、近代文化の凱旋行進の先頭に旗を翻したいという近代都市の要求は、封印された羊皮紙の写本にもとづくものではなく、社会的淘汰の事実を基礎とするものである。社会的淘汰によって、近代都市は、国民が精神的ならびに経済的活動において示してきた至高のものをその手中に収めた。現代の巨大な人口集積点〔としての都市〕の驚くべき魅力は、まさに、資本主義的企業と自由な競争に基礎づけられた経済体制が、卓越した能力を有するあらゆる人びとに最高の賛辞を与えることを確約する闘争の場を提供していることにある。この賛辞を得たいという希望があまりにしばしば無為に帰することとなるとしても、また、この闘技場に赴いた者の大半が最終的には消耗しつくして窮乏化したとしても、新参の人びとの群れはひきもきらず後に続き、なお労働という闘技場に間隙のある限り、そこに足を踏み入れていくのである。

われわれが共に経験してきた発展は、必ずや将来、その最終的な目的を達成することになろう。その後、16 世紀から 18 世紀末にかけての古き都市が示したような定常状態が、いやそれどころか硬直状態が生じるであろう。現在のところ、この点についていたずらに不安をかきたてても、それは徒労となろう。同様に、あらゆる大変革にみられるがごとき社会階層の再編に固有の好ましからざる付随現象について嘆くことも不毛であろう。われわれの大都市の外面的成長が、その住民の内的統合に適合しないことも確かである。社会的対立が大都市ほど深刻な場は他にない。大都市は公共心に欠ける。労働に拘束されている内に、道徳的観念が動揺をきたすためである。しかしながら大都市生活は、すでに技術や、学問、芸術、社会福祉の各領域において、国民の諸力を予想以上に解き放ってきたのである。そして本講演の締めくくりにあたり、われわれの史的考察の成果として、自由選択労働の都市である近代都市は、ギリシャのポリスをも含む過去のあらゆる都市形態と比較して、文化的存在のより高次の形態を意味すると断言しても差しつかえなかろう。したがって、ある種の確信をもって、次のように期待してもよかろう。われわれの大都市が、その内奥に必ずや存在するはずの衰退および崩壊の諸要素

を克服し、市民が公共心を持ち、かつ調和的な協同に従事するように彼らを導くとともに、そして、国民にとって、彼らが大都市に期待し得るもの、すなわち、向上に努める真に社会的な文化発展の歩みにおける先駆者になることに成功するであろう。

原註

1 Zeitschrift des preußischen statistischen Bureaus 1902, S. 44.

2 Statistisches Jahrbuch für das Königreich Sachsen für 1903, S. 62.

3 以下についてはとくに、Robert Pöhlmann, *Die Überbevölkerung der antiken Großstädte im Zusammenhang mit der Gesammtentwicklung der städtischer Civilisation*, Leipzig 1884 を参照。

4 Johann Peter Süßmilch, *Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, dem Tode und der Fortpflanzung desselben*, 2. Ausgabe, 2. Teil, Berlin 1762, S. 335 f.

5 Polit. III, 1, 12.〔牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会、2001 年、119 頁；山本光男訳『政治学』岩波文庫、1961 年、127 頁〕

6 Vgl. Eduard Meyer, *Geschichte des Altertums*, 3. Bd., Stuttgart 1901, § 15.

7 以下については、Adolf Erman, *Ägypten und Ägyptens Leben im Altertum*, 2 Bde., Tübingen 1885/88, S. 242 f. より。

8 「王がそのなかに住まう」の意味（Erman）。

9 神々はそれぞれの故郷の方角に神殿を有することとなっていた（Erman）。

10 Vgl. Heinrich Schurtz, *Urgeschichte der Kultur*, Leipzig 1900, S. 447 f.

11 Vgl. Karl Bücher, *Entstehung der Volkswirtschaft: Vorträge und Versuche*, 3. verm. und verb. Auflage, Leipzig 1901, S. 29.

12 Vgl. Heinrich Barth, *Reisen und Entdeckungen in Nord- und Centralafrika*, 2. Bd., Gotha 1857, S. 49, 78, 123 f., 148, 168 und öfter.

13 この点の基本については、Emil Kuhn, *Über die Entstehung der Städte der Alten Komenverfassung und Synoikismos*, Leipzig 1878 を参照。この他にも、Jacob Burckhardt, *Griechische Kulturgeschichte*, Bd. 1, Berlin 1898 と Julius Kaerst, *Geschichte des hellenistischen Zeitalters*, Bd. 1, Leipzig 1901, S. 1 ff. を併せて参照。

14 この点については、August Boeckh, *Staatshaushaltung der Athener*, 2. Bd., 3. Auflage, Berlin 1886, S. 42 ff. ; Julius Beloch, *Die Bevölkerung der griechischen-römischen Welt*, Leipzig 1886, S. 57ff. ; Eduard Meyer, *Forschungen zur alten Geschichte Bd. 2 : Zur Geschichte des fünften Jahrhunderts v. Chr.*, Halle 1899 に依拠せざるを得ない。

15 Staat der Athener, 24〔村川堅太郎訳『アテナイ人の国制』岩波文庫、1980 年、50 頁〕. 特徴的なのは、アリストテレスが、その試算の最初と最後において、アテネの人口が市内に集中していた理由がこれによって明らかにされたと強調している点である。

16 以下については、Emil Kuhn, *Die städtische und bürgerliche Verfassung des römischen Reichs bis auf die Zeiten Justinians*, 2 Bde., Leipzig 1864/65 ; Eduard Meyer, “Kolonisa-

tion, römische", in : *Handwörterbuch der Staatswissenschaften Supplementband II*, Jena 1897, S. 544 ff.を参照。

17 ローマの人口については、Eduard von Wietersheim, *Geschichte der Völkerwanderung*, 1. Aufl., Leipzig 1859, S. 169 ff. ; Beloch, a. a. O., S. 392 ff.に依拠している。ベロッホの説に対しては、Otto Seek, "Die Statistik in der alten Geschichte", in *: Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, III. Folge, 13. Bd., 2. Heft (1897), S. 169 ff.が批判を加えている。これに対して、Julius Beloch, "Zur Bevölkerungsgeschichte Altertums", in *: Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, III. Folge, 13. Bd., 3. Heft (1897), S. 169 ff.が反駁している。

18 Vgl. Bücher, *Entstehung der Volkswirtschaft*, S. 430 ff.

19 以下の文献をあげるだけで満足せざるを得ない。Beloch, a. a. O, S. 477 ff. ; Ludwig Friedländer, *Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms in der Zeit von August bis zum Ausgang der Antonine*, 6. Auf., Teil 3, Leipzig 1890, S. 175 ff.

20 著者が把握しているのは自治体の数だけであり、1900 年にはその数は 7 万 6,959 にのぼった。その内、3,360 は人口 2,000 人以上の自治体であり。7 万 3,599 は人口 2,000 人未満の自治体であった（Vierteljahrshefte zur Statistik des Deutschen Reiches, Jg. XI (1902), S. 3, 82）。無論、村落の数はこれよりはるかに多い。

21 しかしながら、中世の域外農村市民に同様の発展の契機を見出すことができる。この点については、Karl Bücher, *Die Bevölkerung von Frankfurt am Main im XIV. und XV. Jahrhundert*, Tübingen 1886, S. 366 ff.を参照。

訳者あとがき

本稿で訳出したカール・ビュッヒャー Karl Bücher（1847-1930 年）[1] の「現在と過去の大都市」は、1903 年に出版されたドレスデンのゲーエ財団Gehe-Stiftungの年報第 9 巻『大都市 ―― 都市博覧会に寄せた講演ならびに論考 ―― 』に収録された講演録である[2]。本文中の（　）は著者本人による補足を、〔　〕は訳者による補足を示している。また、一般に馴染みの薄い固有名詞や概念などには、当該語句の直後に原綴を補った。また、原註については、原典と同じく文末註とするとともに、可能な限り、出典の書誌情報の補完につとめた。

『大都市』は、別稿[3] で論じたように、1903 年 5 月 20 日～ 9 月 30 日にドレスデンで開催された「ドイツ都市博覧会」の事前企画として、1902/03 年冬にゲーエ財団が主催した講演会の講演録を編纂したものである。『大都市』に収録された論考は次の 7 編であり、なかでもジンメルの「大都市と精神生活」は大都市論に関する社会学の古典として広く知られている。

カール・ビュッヒャー「現在と過去の大都市」
フリードリヒ・ラッツェル「大都市の地理学上の位相」
ゲオルク・フォン・マイアー「大都市の人口」
ハリンリヒ・ヴェンティヒ「大都市の経済的意義」
ゲオルク・ジンメル「大都市と精神生活」
テオドール・ペーターマン「大都市の精神的意義」
ディートリヒ・シェファー「大都市の政治的ならびに軍事的意義」

ドレスデン都市博覧会の目的は、「20 世紀初頭におけるドイツ都市の実態、とりわけ過去数十年にわたる大都市自治体の発展過程と自治体行政の多様な領域における進歩を、実例にもとづき平明に示すこと」[4] にあった。19 世紀末から 20 世紀初頭かけてのいわゆるベル・エポック

1　Bücherの日本語表記は、「ビューヒャー」や「ビュヒァー」とされることもあるが、本稿では、大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典第 3 版』（岩波書店、1992 年）の表記に従って「ビュッヒャー」とした。
2　Karl Bücher, “Die Großstädte in Gegenwart und Vergangenheit”, in : Theodor Petermann (Hg.), *Die Großstadt. Vorträge und Aufsätze zur Städteausstellung,* Jahrbuch der Gehe-Stiftung Band IX, Dresden 1903, S. 1-32.
3　森宜人「世紀転換期ドイツにおける都市政策理念 ― 1903 年ドイツ都市博覧会を中心に ― 」『西洋史学』第 232 号（2009 年 3 月）。
4　同上、24 頁。

は、急激な都市化によって生じた数々の問題に対応するために、都市自治体および民間のボランティア組織による社会改良が西欧諸国において共時的に進展し、都市計画や、インフラ整備、社会政策が広範に展開された時期でもある。こうして形成された都市空間は、本稿冒頭にみられる、「近代的文化発展の一領域における進歩」というビュッヒャーの言葉にあるように、同時代の人びとにとって「モダニティ」の象徴的な存在となった。これと軌を一にして、従来、万国博覧会において展開されてきた都市計画や住宅政策のあり方をめぐる国際的な議論の場が、次第に、より専門化された国際会議や博覧会に移っていった[5]。

こうしたコンテクストにおいてドイツ都市博覧会は開催されたのであり、会場には、他国よりも充実していたといわれるドイツ都市政策の成果を示す図版資料や、統計資料、そして各種インフラの実物大模型などが展示された。そして、「外国はもはや学ぶべき師ではない」[6]ことがドイツ都市博覧会で明らかになったとする企画責任者R. ヴットケの言葉にあるように、この博覧会は、大都市の近代性や、都市政策の成果を称揚する「大都市賛美」の言説を具象化したイベントであった。「現在と過去の大都市」も、こうした「大都市賛美」の言説を代表する論考の1つに数えられる。

著者ビュッヒャーは、グスタフ・フォン・シュモラー Gustav von Schmoller（1838-1917年）や、ルヨ・ブレンターノ Lujo Brentano（1844-1931年）と並ぶ後期歴史派経済学の代表的論客であり、とくにその経済発展段階論は、わが国においても、創成期の経済史学のあり方に大きな影響を及ぼした。ビュッヒャーの主著『国民経済の成立』は1893年に初版が刊行され、以後、版を重ねるにつれて収録論考も次第に増加し、1918年には第1集と第2集の2巻構成となった。わが国では、權田保之助によって同書第9版（1913年刊行）が『経済的文明史論（国民経済の成立）』（内田老鶴圃、1917年）[7]として初めて邦訳され、さらに同じく權田の手によって第1集第16版（1922年刊行）が『増補改訂　国民経済の成立』（栗田書店、1942年）として訳出された。第2集については、その第8版（1925年）を淡川康一が、『国民進化経済論第2集』（雄渾社、1958年）として訳した。

本稿「現在と過去の大都市」も、1906年に出版された第5版において初めて『国民経済の成立』に収録され、權田訳『経済的文明史論（国民経済の成立）』および『増補改訂　国民経済の成立』にも「五千年来の大都会様式」として訳出されている。しかしながら、同稿は『国民経済の成立』に収録されるにあたって大幅な加筆・修正が加えられているため、オリジナルの見解を再現するために、あえて本稿において訳出した次第である。ただし、「現在と過去の大都市」と「五千年来の大都会様式」には内容の重複する箇所も少なくなく、翻訳にあたっては後者の權田訳に助けられる所が大きかった。とくに、古代エジプトのテーベを讃える詩につい

5　この点については、フリードリヒ・レンガー（森宜人訳）「近代のメトロポリスを定義する ―― 19世紀中葉～20世紀中葉の万国博覧会を手がかりに ―― 」一橋大学大学院経済学研究科CCES Discussion Paper Series. No. 63（2016年3月）を参照。
6　森「世紀転換期ドイツにおける都市政策理念、42頁。
7　訂正改刻第2版が1921年に同じく内田老鶴圃より出されている。

ては、權田訳以上に格調高く邦訳することが困難なため、そのまま引用することとした。

『国民経済の成立』の第5版以降には、「五千年来の大都会様式」だけでなく、「中世都市の社会組織」と「進化史的意義より見たる国内移住と都市制度」の都市史に関する論考が2編収められているが、両論考で展開される議論を内包しつつ、より広く「世界史」の観点から都市社会の歴史性について論じているのが、「五千年来の大都会様式」であり、その原型となった「現在と過去の大都市」である。本稿末尾において、「近代都市は、ギリシャのポリスをも含む過去のあらゆる都市形態と比較して、文化的存在のより高次の形態を意味すると断言しても差しつかえなかろう」と結論づけているように、ビュッヒャーは比較史的観点より、近代の大都市の社会的あり方を高く評価する。他方で、「公共心」の欠如のゆえに、「社会的対立が大都市ほど深刻な場は他にない」ともされ、近代都市特有の諸問題についても警鐘が鳴らされた。

この点についてビュッヒャーは、『国民経済の成立』第2集に収録されている「近代都市自治体の経済的課題」[8]において、自説を詳しく展開している。同稿でも、近代都市の多岐にわたる社会問題の根源を、「公共心」の欠如に求める。その上で、「公共心」を涵養するために、市場原理や自助精神を社会秩序の基盤としつつも、住宅政策や、土地政策、各種供給事業の公営化などによる都市自治体の広範な介入を通じて、すべての住民に、1つの「利益共同体」(= 都市)に所属していることを自覚させることが、「都市自治体の経済的課題」として定義される。こうした見解は、同時代の統計学者ヴィクトル・ベーメルトVictor Böhmert(1829-1918年)が提唱した、都市住民のゲマインヴォールGemeinwohlを実現するために、経済自由主義の原則を基本としつつ、必要に応じて公的セクターによる介入を正当化する「都市の社会的課題」と同じく、同時代の社会改良を推進する規範理念となった。

ビュッヒャーとベーメルトの議論は、同時代の社会思想の文脈においては、ビスマルクの社会介入に対する反発から、主に都市レベルにおける自助促進の枠組みを形成するとともに、市場への社会的介入を支持する改良的経済自由主義Reformerischer Wirtschaftsliberalismus、ないし自治体自由主義Kommunalliberalismusとして位置づけられる[9]。ビュッヒャーについては、社会改良の指針を検討する上で「公共心」に着目したことが大きな特徴であり、それは、中世都市におけるゲノッセンシャフト的な経済活動と、共同体原理による社会秩序の形成に対する高い評価に由来するものであった。そして、このようなビュッヒャーの歴史観が明瞭に提示されているのが本稿「現在と過去の大都市」である[10]。

なお、訳業にあたっては、ギリシャ語およびラテン語の表現については本学経済学研究科の大月康弘先生に、本文中の微妙なニュアンスについてはドイツ語ネイティブの立場から畏友シ

8　Die wirtschaftlichen Aufgaben der modernen Stadtgemeinde：なお、淡川康一はこの標題を「近代都市の経済的職能」と訳している。

9　この点については、Hans-Georg Fleck, “Sozialliberalismus und Gesellschaftsreform seit der Reichsgründungszeit”, in : Detlef Lehnert (Hg.), *Sozialliberalismus in Europa. Herkunft und Entwicklung im 19. und frühen 20. Jahrhundert*, Wien u. a. 2012, S. 35-65を参照。

10　ビュッヒャーの都市論全般については、森宜人「ドイツ社会政策学会における近代都市論 ―― K. ビュッヒャーの所論を事例に ―― 」『経済系』第240集(2009年7月)を参照。

ュテファン・メルテンスStephan Mertens氏にそれぞれご教示いただいた。また、大学院ゼミナールに参加していた横越建城氏には、関係資料の蒐集に尽力してもらった。ここに記して、心より御礼申し上げたい。

2016年12月28日

森　宜人

森　宜人
（一橋大学大学院経済学研究科准教授）

一橋大学社会科学古典資料センター　*Study Series. No. 73*
発行所　東京都国立市中２－１
一橋大学社会科学古典資料センター
発行日　2017 年 3 月 31 日
印刷所　新宿区新小川町３－９
（株）平河工業社